



針葉樹會報

霧ヶ峯懇親スキー旅行記。(クン)

一、送別會

時は一月廿五日。その日暮れてまもなくのこと。怪しき哉。新宿のモナミの地下室に寄り集り、何事か、喋々話し合ふ。色黒き青年達あり。或ひは樂しげに談笑し、或ひは愁ひ含みて默想す。これを望み見るに、エチオピアの愛國の徒の集ひ、はた又、シヤム國王、復辟運動の策士とも覺ゆ。やがて時到期りて、一同、席に着するを眺むるに、年老ひたるあり、若きあり、トレンカー如きあり。アラヤ殿下如きあり。熊の如きあり、乾瓢如きあり、公爵の氣品供へ持つものあれば、車力、番頭の類ひもあり。その集ひの何たる。テーブルを異にせる客の測り知り得ざるところなりき。轟く拍手に迎へられて、一男、立ちて何事かを蚊の咽び泣くそれてきの聲もて、語り始む。耳を欬て、これをうかゞふに………：と言ふ様な風だったかも知れない、僕達の今年の送別會は、打橋、安達、堀岡、中島、小橋君の本科卒業、及豊田君の専門部卒

業を御祝ひせんと、その饗、豊かならずと雖も、心こめて今日此處に一宴を設けて、その幸を、祝福せんとしたのである。集る者二十五名。そのさかんなること、實に未曾有の部の盛事と言ふ可きである。

食事終れば、各目立ちて已のが所懷を述べ、新しく社會に雄々しくも躍り出る年若き先輩の御成功を祈り、又残る部員として既に眞摯なる覺悟あるを誓ふ。雑談に入れば、お爺さんの數十分に亘る、甘い様な、辛い様な、嬉しい様な、悲しい様な、滔々としてつきざる經驗談を白眉として、山の話。谷の話。雪の話、岩の話はいつまでも終らなかつた。

二、富士にて

その夜半、ボン、カン、スケ、に塚本、森川の五君。富士山麓吉田口なる桂屋へ向ふ。その姿たる一、二時間前の金ボタンとは、恐らくは、同じ人とは見るものなからむ。燦然たるニツカーに脊廣服のロンベンでありました。どうせ大月が二時だからとこゝを先途さまくし立てるは、これぞ、天下に名立たるライネ・インドア・スキー術。ビツケル、アイゼンの響きは、幾度か乗客の夢をおびやかす、嘘も誠に論じ合ふ、誰かのスキー理論に耳を傾けさせられた人は、恐く四・五の少數にとゞまらなかつたであらう。大月で乗り換へれば、合客は無く、かゝる所でスキーを論ずるは、もごより吾等の爲すわざにあらねばとて、カマキリ氏は長々と、カンビヨール氏は丸々と、車中一杯に散らばつて、一睡を貪る。

漸く夢も佳境に入る頃、電車は早くも吉田に入つて、悲しくも車掌の一端に、起き出さなければならなかつた。あゝ、昔ののろいトロツコ列車が懐かしい。

例によつて例の如く自動車屋が起きない。併し待合室に火と人のあるを見るや、七ツ道具も物々しく、入りこむより早く始めるは言はずと知れたイン・ドア・スキー術。やがて乗り込むバスの天井には早速穴があき、運轉手は躍るピツケルに膽を冷す。行く程に町をはなれ神社を過ぎれば、早や兩側に雪を見る。雪が一寸一寸づつふへる毎に、皆は次第に大人しくなつてゆく。君子、危きに近寄らずの類ひか。

行く手に崇く、残月に照らされて、神峯富士は浮ぶ。青く月光に輝くその肌。暗黒の中空に聳え立つ靈峰。嚴然たる哉その姿。仰ぎ見る山の壯嚴。青の神秘。靜寂たる哉大自然。これぞ、山を愛する者のみに神々の興へ給ふよろこびの境地。月の最後に強く輝いて山のうしろに沈めば、早や、東は薄紫に明け始める。夜明け。大氣はいたい程に冷い。

桂屋には、折よく佐重も居たので、共に鈴ヶ原へ向ふ。雪は暴風に繁吹き立つ小波の形して氷り、その固きことコンクリートの如く、その鋭きことカミソリの如し。その一步一步に立つ音は、カラカラバリバリゴソゴソザアザアカラゴソゴソバリバリザアザ賑かなること、喧しきこと。お互に話することさへ出来ない。直滑降をすればするで、幸か不幸か、スキーが一度古いシュプールに入れば、それが昇りだらうと降りだらうと、當人にはお

かまひなしに、スキーだけはそつちへ走つて行く。これがほんとにスキートレールかも知れない。強引にその細溝から踏み出せば、再びカリカリバリバリガサガサザアザア。にはかに音の止んだ方を眺めれば、名譽の戦死ならぬ轉倒。やゝあつて、立ち上るその様は、又と見るにしのびなき姿なり。

小御岳も同じコンディション。車中では一かどのスキーヤーたりし面々も、惱みは深し泣き面に蜂。今更 鐵道省の掲示を恨んでも始まらない。何處へ行つても唯々、カラカラ・バリ カラカラ・バリ（註。カラカラとは滑る音。バリとは表面の氷つた雪をおしりでつきやぶる音なり。）を繰返すばかり。クリスチャニアでも止まらない。ボーゲンでも前進する。奪鬭苦闘は數時間。腰は痛み、顔面手首からは血潮したたり流る。これではたとへ針葉樹會の猛者と雖も、同一の結果に陥らんこと明かなればとて、こゝに凝議一決、折良く來合はせたハイヤーに打ちまたがつて、吉田目指して駆け下る。心の中ぞ勇ましや。時間を争ふためと言つて、大月までもぶつ飛ばす、心の中ぞ哀れなる。

一度び山を離れ里に向へば、勇姿颯爽と手振足振り宜しく語り出す、つきぬ話を打ち切つて、東京へ打つ電信二通。こゝにピツケル、アイゼンからシュラフザツクまで持參で、霧ヶ峰行きと決まる。時正に晝の二時。こゝで夜中まで待つ程馬鹿でなく、甲府丸茂先輩を尋ねて行くことにしました。

甲府は驛前の馴染の蕎麥屋で葡萄酒飲んで電話すれば「只今商工會議所に行つておられます」とのこと。こゝで一同落膽失望。

しかし尙ほ勇を鼓舞して會議所まで電話すれば、事は意外。所は會議所さえらく厳かめしいが、今日は甲府スキースケート倶楽部の講演會。丸茂先輩はその監事だつた。「來い」と言はれるより早く、一同スキー姿で會場へ繰込む。講師は宮川某氏。題はスキー一般。でも幸か不幸か時間なくして途中で出場しなければならなかつた。

—三、霧ヶ峰—

八時。待つ程に 一行のオメシ列車は到着する。一行は九名。その中、先輩は孫さん近ちゃん二人きり。でもお土産はたくさんにありました。現役は荒次郎總大將として、張切爺、新羅三郎エチ坊の専門部勢。又は新銳のハシゴ、鐵さん、公爵引き連れて並び居る。各々一かどの大將面らして黙々たり。又喧々たり。その勢ひ當る可からず。見送らるゝ丸茂先輩に別れをつけて車室に入れば前代未聞。中川孫一氏より先發隊一同、お賞めのお言葉に接す。電信其の他の手配の萬全たることに對してなされたものにして、決して「汝等よく吾れをコンクリートスキーの危難より救ひ出せしことよ」とは仰せられなかつたのである。

やがて又汽車は上諏訪に入り、孫さん先達で湖畔ホテル油屋別館に向ふ。相憎満員。止むなく、たかのか言ふ宿屋の演藝場へ泊ることとなる。隣室では藝者を入れて賑かな宴會。それでも明日はスキーを買つてそれから滑つて轉んで歸る様でした。諏訪の田舎も随分便利になつたもんです。こちらはこちらで、支那蕎

麥と鍋焼きで、今夜一夜の腹ごしらへにさ、二杯三杯食べた人も居た様でした。

明ける日の空は日本晴れ。豪勢な朝食に思はず時を過し、七時過ぎて宿を出發。省營バスに乗つたのは八時頃。車の登るにつれて、諏訪湖が、夢の海が、木曾が、次第に後ろに見え始める。途中しばしば停車を餘儀なくされたが一〇時には一同恙がなく池のくるみへ着くことが出來た。

前方に果しなく展開する大雪原。それにも増してそこに集り滑り轉ぶ驚ろく可き大群集。正に鎌倉逗子の夏のそれ的き。日本のスキーも——いや 鐵道省營スキーも、えらく發達したもんだと感ぜられずには居られない。歸りのバスが早くも思ひやられる。正面に遠く、夏ならば紫に霞む蓼科が、今日は白き衣着て横はる。左に車山、右にカボツチヨ。八ヶ岳も頂きを白く輝かして長き裾野を南へ引く。その南には、甲斐駒、白峰が輝き、木曾御岳乗鞍も、遠く近くより呼びかける。北も眞白き姿で遠く霞んでゐる。

用意なれば、一行はカボツチヨ目指して前進する。雪の状態良好ならず。カボツチヨも途中で中止。此處に於て始まるは待望久しき大小スキー天狗の初顔合せ。こんな筈でない。あんなことはない。さお互ひにその技の^{わざ}上がらぬを雪のためにして心細くも慰める。今日、輝く雪の王者は、言はずと知れた天下の名雄、荒次郎。併し彼は昨日送別會を開いたのだから現役でない。そうかと言つて未だ卒業しないから先輩でもない。依てこれを除き、先

輩學生を較ぶるに、軍扇は先輩側に舉げられる。即ち、二十幾貫さかの重體を、クリスチャニアにボーゲンに、はた又ジャンプターにまで、現役の猛者連をして茫然たらしめた今日の近ちゃんの大活躍は、誌上に記して長く傳ふ可き好技なりき。ヒツコリー新調の孫さんは、現役相手に大奮闘中、惜しくも足首を痛めて、その眞のお手並の、拜見出来なかつたのは、現役一同の、深く悲しむ所なり。

此處で、ボーゲンからクリスチャニア、ジャンプターまでの講習又競技を終り、歸りはジャンプ臺傍きの急斜面を一人づつ、直滑降。助さん先頭に、三郎、鐵さん、それに近ちゃん。終りまで立ち切つたのはこれだけ。あとは途中で眼鏡は東に帽子は西の七轉八倒。でも一人も滑りおちない者は無い。孫さん大感心の體。晝食は丸茂さんを加へて東京の御馳走に舌鼓打つ。孫さんは、今夜の大阪行きのため、二時先發さる。その元氣たる、恐る可し。残る勇士の面々は再びゲレンデに立ち出でて、その技を競ふ。近ちゃんは、さすがにお疲れの様でした。

三時。カボツチヨの向ひの丘の上より、茶屋までさばす快き直滑降。それを最後に、荷物まとめて、下り路へ。混み合ふ人をなぎ倒しつゝ、降つてバスに漸くつめ込まれ、辛くも驛まで運ばれる。三臺の、スキー列車は眞中に、景色の惡き不運をかこちつゝも雪から離れて早くも元氣付くは、浮世の習ひとは言ふものゝ、浅ましき限りなり。つきぬ思ひを口に任せて、ベチャクチャシャべつて惡口言つて、お辨當食べて、鹽山過ぎて、大月通れば、や

がて間も無く淺川の驛。かくて漸く新宿に、一同無事に着きにけり。

〔註。この文中に見ゆるニクナメは未定稿に屬す可きもの多し會員並に現役の諸兄よ。宜しく而る可く御批判御判定の程御願ひ申します。〕

八海山紀行

村尾金二

四月二十日夜十一時半上野發。二十一日朝六時五日町に着きました。お天氣がよくて驛から八海山の岩峰がよく見えました。今日は行ける處まで八海山に登るつもり。ブラブラと町を歩き、橋を渡り眞直な街道を大崎村まで一時間かゝつて歩きました。藤屋と新しくペンキで書いた看板が立てられた外、あそこは元の通りでした。裏の池には今はぬるんだ春の水の中を、鯉が矢張り泳いでゐました。うまそうでした。里宮まで三十分の道は昨年改修して立派になつてゐました。里宮は今日は神主も居らず、開店休業です。八時其處を出て急な登りです。それでも荷が割に軽く、此の間の様な苦行ではありません。二合七勺の水の出てる處で休みました。今でもコン／＼と流れてゐます。十時そこを出るとずつと雪があります。道が分らぬから好い加減斜面を上るゝ(例の三合目の二本杉を目當に)すぐ尾根に出ました。出るトタンに岩と雪の八海山が白日の下に屹立してゐました。思はずアツと云ひました。その右に眞白に續くのは、兎は見えず、丹後山、越後澤山と

思ひます。現に、此の前は此の足で踏んだ山なのだが、その風貌に接することは出来なかつた。それが今、岩のひだまでハッキリ見せてくれるのです。それから細い尾根の上の雪を行くのです。處々真中が切れてゐて、右へも、左へも雪が落ちそうになつてゐる處は、どちらを歩いてても怖くて恐る恐る行きました。女人堂の下の開いた處が十二時。アイゼンを着けました。八海山は絶えずその姿を見せてゐます。北には守門、飯豊が遠く見えました。天氣が續いてポカ／＼する暖かさ。遠くは春霞に包まれてゐました。仙之倉と思はれるのが南の群山の中に望まれ、その右が苗場だつたのでせうか。顔がほてりました。例の胎内潜りとか云つて、變な岩と石楠木の間をよち登つた所は尾根が狭くて急で、雪が切れてゐるのが下から見えます。近づくとも左は草付でとても登れず右の急傾斜は石楠木の密生です。そして真中の雪は切れ落ちて、二丈許りの壁で行く途の真正面を閉してゐます。尾根の真上で谷まつた譯です。仕方がないからビツケルを打ちこんでブラ下りながら雪を蹴つて足場をつくり兎も角も其處を上りました。それからば廣い雪田です。それが終つて石楠木の間を抜けたら、もう八合目です。田村磨の様な石像と、立つてゐるのか坐つてゐるのか、一寸分らぬ行儀の悪い地藏さんと、例の鐘があります。すぐ向ふが小舎、その後が高く岩峰が聳えてゐます。二時でした。中の岳が大きく、駒がその左に急な岩の膚を見せて静まりかへつてゐます。雲が出て参りました。駒の斜面を落ちて行く雪崩がその間を響いて物凄い勢でした。時間もないと思つたから急いで下りました。例の雪

の壁は下りは怖くて降りられません。石楠木の枝にブラ下つてリエックサクを引かけたり、足を宙に浮かしたり、悪戦苦闘の十五分間は随分永い時間だと思ひました。それからは飛ぶ様に滑りました。そうです飛ぶ様にです。二時に頂上を出て途中で食事をしたりしても四時半には里宮に着きました。八合目から一合目まで二時間半だから一合の間が約二十分です。

五日町に着いたのが六時半。一時間待つて新潟行の汽車に乗りました。右御報告まで。(四月二十二日)

富士山文献解題(一) 増山清太郎

野中至著「富士案内」四六版一冊

明治三十四年八月、春陽堂發行

冬期富士山初登攀、並に劔ヶ峯に於ける冬期觀測の記録である。野中至、始の名は瀧太郎、慶應三年八月筑前國早良郡鳥飼村に生る。野中勝良(後の東京控訴院判事)の長男である。十四歳にして東京に移住し、醫師たらんとして獨逸協會學校に學び、次で大學豫備門に入つたが、早くから氣象學を好み、富士山頂で冬期觀測をなさんと計畫してゐた。よつて明治二十二年退學し、爾來その準備に専心し、中央氣象臺技師和田雄治の援助を受け、明治二十八年から開始する準備が出来たのである。併し當時は冬期の頂上の様子が全然知られてゐなかつたので、豫め探査の必要を感じ明治二十八年一月二日單身徒歩で東京を發し、藤澤及び太郎坊(御

殿場口)に一泊、四日に頂上を志したが、五合目以上は氷結して危険極りなく、用意の鳶口も折れて目的を達しなかつた。依つて第二回には釘底の靴を作り、工夫用の鶴嘴を背負ひ、同年二月十四日再び單身徒歩で東京を發し、前回の如く十五日は太郎坊に泊り、十六日午後零時五十五分無事頂上に達し、觀測所建設の地をトとして下山した。これ實に確實な記録の存する限りで、冬期富士登山の嚆矢である。

第二回の登山の經驗によつて冬期滞頂の自信を得たので、その夏劔ヶ峯頂上直下の西側に、廣さ六坪の觀測所を營み、十月一日から翌年六月末日迄の豫定で、單身觀測を開始した。夫人千代子は當時三歳の長女その子を、福岡の實家に托し、十月十二日登山して夫を助けた。處が十一月初旬から千代子は浮腫に犯され、一時重態に陥つたが下旬からは快方に向つた。十二月に入ると至が浮腫に罹り千代子より更に險惡の病勢となつたのを、見舞の爲登山した山麓有志の知る處となり、次で同じく夫妻を見舞はうとして御殿場に來た和田雄治は、救援隊を組織して登山し、十二月二十二日下山を肯じない兩人を強ひて強力に背負はせ、八合目に一泊、二十三日無事下山した。

その一部始終は雑誌「太陽」「氣象集誌」「地學雜誌」等に發表されたが、それ等をついに纏め、若干の寫眞、案内記、中村不折のスケッチ、及び大橋乙羽の紀行「富士詣」其他を加へて一冊としたのが、この「富士案内」である。第二、三版には寫眞を除き附録として前田曙山の案内記及び植物目錄を加へてゐる。簡にして要

を得、朴訥飽らず、眞に名著たるを失はない。案内記や他人の紀行を加へたのは少しく書物としての品位を墜した嫌がないでもないが、その爲によく賣れて、現在一冊五拾錢で吾々の手に入るのは却つて感謝せらるべきである。

この事があつてから、冬期登山を試みるものが増加し、いづれも著者を訪ねて指導を求めたものである。數年前まで、冬期登山が専ら御殿場口から試みられたのは、初登攀がこの口からなされたからであらう。その後著者は二十何年か、岳麓瀧河原(陸軍廠舎の數町下手)に居住し、馬車鐵を經營してゐた。その間明治四十二年に再舉を企て、現在と同じ場所で觀測したさうであるが、詳細は知らない。その後一時東京に歸り、會員中川氏の隣家に住んだ。現在は茅ヶ崎に餘生を楽しんで居らるゝ。千代子夫人は既に喪い。

この事が當時如何にセンセーションを捲起したかは、下山に際し東京帝國大學は、教授三浦謹之助を岳麓に派して診察させたとか、伊井蓉峰一座が芝居に組んで、市村座に上演したとか云ふ事で知れると思ふ。一時國定教科書に載つたことも聞いてゐる。

因にこの事件に關しては尙左の資料がある。本書に採録されたものは總て省いた。○印は次號以下に解説を試みる。

和田雄治「野中至氏の富士山觀測所」(「太陽」第二卷第一號所載、明治二十九年一月五日發行)

○落合直文著「高嶺の雪」

○野中千代子「芙蓉日記」

野中至「富士山と氣象」〔日本山岳志〕所載）
北尾録之助「N氏の話」〔日本山岳巡禮〕所載）
東京朝日新聞第一七三五〇號、昭和九年八月九日發行、
まだ一つ確に讀んだ覺があるが、今どうしても思出せない。

山岳部報告

日誌 (一九三五・四月)

四月二十日(土) 新入部員歡迎會 於國立部室

(出席部員) 新入部員を併せて二十三名。及び杉浦徳次郎先生

(新入部員) 鈴木惣兵衛、齋藤明智、日江井正己、大塚武

奥山忠教、毛塚由太郎、秦良平(以上豫科一)

四月三十日(火) 定期部員集會 於國立部室

出席部員 十三名

第一回の讀書會を開く。(Apelude to adventures)

(以上)

記録 (昭和九年十一月—十年四月)

十文字峠越え(一一、廿二—廿四) 柿原、岩崎、森川

御在所山 (一一、廿四) 林

岩殿山 (一一、廿五) 小谷部、塚本、湯田坂、鷹野

神津牧場 (一二、一五—一七) 林、柿原

大岳山 (一二、一六—一七) 小谷部

關、燕スキー行(一二、一七—二三) 柿原、林

各期スキー合宿(關及び野澤)(一二、二〇—二九)

岩崎、林、柿原、堀岡、小林、新羅、高原、原、遠藤、他、體

操科教官十名、部員外十八名

池ノ平スキー行(一二、二一—二四) 森脇、塚本、榎本、森川

鹿島槍、東尾根(一二、二三—三〇) 小谷部、鷹野

(一ノ澤の頭下、約百米の地點にテントを張り、荒澤の頭直下に至る。)

乗鞍岳 (一二、二四—三〇) 森脇、塚本、榎本、森川

乗鞍岳 (一二、二八—三一) 小林、遠藤

八方尾根、五龍岳附近(一二、二九—一、四) 増山氏、堀岡、齋藤

八方尾根、五龍岳(一二、三〇—一、五) 小谷部、鷹野

神ノ田圃、樽池附近(一、五一—一、八) 齋藤、小谷部、小柳

燕スキー行 (一、六一—一、七) 原、清水

武甲山 (一、一二—一三) 岩崎

雲取山 (一、一八—一、二〇) 柿原

霧ヶ峰先輩學生懇親スキー行(一、廿五—廿六)

中川、近藤兩氏、堀岡、林、望月、小谷部、塚本、豊田、鷹

野、森川、原、岩崎、高原、新羅

高雄山スキー行(一二、三) 小谷部

大菩薩近傍 (一二、六—一二、二一) 小谷部

管平、鹿澤スキー行(一二、六一—一、一〇) 原、岩崎

赤城山スキー (二、九—二、一〇) 小林、塚本

霧ヶ峰スキー練習 (三、六—三、一〇) 原、清水

春期スキー合宿 (三、一〇—三、一七) 小谷部、塚本、小林、森

脇、原、高原

澁峠越え (三、一一—三、一四) 原

木曾葎原スキー練習 (三、一六—三、一八) 小谷部

藏王山 (三、二一—三、二三) 堀岡、小林

奥日光スキー行 (三、二六—三、三〇) 原

榛名山スキー行 (三、二八—三、三〇) 岩崎

關スキー行 (三、二八—四五) 新羅

苗場山、神樂峰スキー行 (三、三〇—四、四) 林、鷹野、岩崎

八方尾根、五龍岳 (三月) 森川

大菩薩峠 (四、九) 小林

飯豊山 (檜山澤より) (四、一〇—四、一六) 齋藤、林、鷹野

三頭山、御前山 (四、二一—四、二三) 林、森川、高原、原、岩崎

白馬岳、榑池 (四、二六—四、三〇) 森川、岩崎、原

(以上)

會員消息

○太田又一君 大阪市住吉區住吉町帝塚山一三七五

交樂莊へ轉居

○加藤安吉君 勤先 名古屋鐵道局運輸課自動車係

住所 名古屋市東區矢田町六ノ四一

針葉樹會例會 四月二十三日(火) 如水館中集會室

(出席者) 中川孫一、吉澤一郎、近藤恒雄、磯野計藏、久

保田禮治、園山德三郎、吉澤松次郎、他學生七名

春季國立懇親會 五月十二日(日)

(出席者) 中川孫一、松本謙三、村尾金二、吉澤一郎、同

謙一、近藤恒雄、磯野計藏夫妻、園山德三郎、増山清太郎

吉澤松次郎、他學生七名。

編輯者より

と云つても、別に原稿の催促ではないから御安心の程願ひます。愚生編輯の大任を委されてより、いやに多忙で、ルビンシュタインもデンバリストも聴く餘暇なく、第一位の明治が何時の間にか五割になつてしまつたり、武藏山が日下開山になつたりしてゐる。そんな譯で四月初に發行する四號が五月中旬、五號がやつと五月末。でも漸く暇になつたので六號は六月の初旬には發行します。以上でお詫は止めて。

原稿の集りは實によく、編輯者の訛言を並べる餘白も少い位です。御安心下さい。尙、會員消息、登高記録は出来るだけ詳細に載せ度いと思つて居ますから細大もらさず小生宛御報知下さい。殊に會員消息は自分の事のみに関りませんから其のお心算で。それから針葉樹會報一號より昨年の十二月號迄を製本する心算でありますが、希望の方は小生宛御送附下されば、一所に纏めて製本しても宜敷いと存じます。費用は一圓前後で相當立派なものが出来ると思つてゐます。